



白寿の寂聴さん

岡田 安弘

俗界にいては遊興に走る。入社試験に挑む我が身を深山に隔離しようと腹をくくる。比叡山の頂から琵琶湖側への険しい斜面。天台宗総本山延暦寺の寺々が広がる。東塔(とうとう)、西塔(さいとう)、横川(よかわ)の3つの境内からなる。根本中堂がある東塔の端、崖に沿って宿院があった。

今は延暦寺会館というホテルになっている。当時は木造2階建て、40室ほどの信者宿だった。就職浪人が、ここで1年近く暮らす。精進料理の板前さんと、まかないの女性10人ほどが麓から坂本ケーブルで通勤していた。

当時の宿院主任、武覚円・僧正と父親が懇意で、空き部屋を借りることが出来た。武主任は後の大僧正。51歳で出家した作家、瀬戸内寂聴さん(権大僧正)の師でもある。初の修行で2か月間、横川に籠る寂聴さんを指導する。

修行僧と学問僧

未明、宿院の窓。特異な形の笠を手に、杉木立に消える白装束を垣間見る。それが千日回峰行の僧だと武主任に教わる。死に装束に蓮華笠、素足にワラジ姿。5年間、十六谷と言われる険しい山中を毎夜巡拝。さらに2年間の断食、断水、断眠の行が待っていると聞き、思わず背筋を伸ばす。叡山には学問僧と修行僧の二派があることを知る。

ほどなく、学問派の青年僧、今出川行雲さん(立命館大4回生)と相部屋になる。卒論を書いていた。今や大僧正。昨秋、京都・山科の天台門跡寺院・毘沙門堂住職に就任。天台宗の最高位・座主(ざす)の登竜門である戸津説法師のひとりだ。

当方は大浴場の薪焚きや大食堂の配膳、寺男のように働く。食費、宿賃免除の返礼のつもりだ。3食、精進料理で通す。「体がもつまい」と

親友が牛肉を差し入れに来た。心配無用と持ち帰らせる。見かねたか、まかないのベテランが「そんなに無理しなくても。お坊さんも自坊では普通の食事よ」と言い、食事に招いてくれた。1年間で下山したのは、この1回だけだ。

僧侶と般若湯

昭和31年、若い寺男が大講堂に放火した。以来、延暦寺は外部の者を受け入れなかった。「あなたの入山が認められたのは武主任のおかげ、感謝しないとね」。すき焼きをご馳走になりながら内輪話を聞く。「お山の湿気は座布団が腐るほど。お酒を呑む若い僧は口実に、般若湯(酒)で湿気を吹っ飛ばすと言ってるわ」。

僧位と上納金

あれから30年。瀬戸大橋が開通し、記念のシンポジウムを担当することになる。四国・徳島出身の寂聴さんにパネリストを依頼するため、嵯峨野の寂庵を訪問。挨拶もそこそこに「昔、武覚円さんにお世話になった」と打ち明ける。「ご存じ?」と身を乗り出す寂聴さん。60歳代の半ばだった。

横川の厳しい修行を振り返る。話が一段落した。「僧位は要らないと言っているのに、順に上げて来るの。そのたび上納金が高くなるのよ」。豪快に笑い飛ばす。他宗派に比べて檀家寺が少ない天台宗にとって、人気作家は願ってもないドル箱だ。

10年ほど前、脊椎圧迫骨折で入院。TVの「徹子の部屋」で、激痛の様子を語る姿が目につかぶ。「もう神も仏もないと思ったわ」。尼僧らしからぬ、開けっぴろげな話しぶり。昔と少しも変わらない。

あの世への覚悟

5月15日、白寿を迎えた。恋多き波乱の半生。残された半世紀、尼僧として仏の道を説く。執筆意欲なお旺盛、今も5編の連載を持つ。朝日新聞の連載「残された日々」に書き残す。「人道の間違ひも罪の罰も老いの一身に受け止めて、あの世の地獄へ墮ちようと思ひ定めた」。